

## 宗三郎さんの家に伝わる話

ぼくの家では大晦日になると、神様、仏様にお正月を迎えていただくための飾りつけをします。

「ねえねえ、この白い半紙の上に置いてあるおもちのお供えはなんね？」

「これはね、もち、米、こんぶ、するめを包んだほうしの玉、ゆずり葉、もろむき、みかん、おごく、そしてお光りをお供えしているのよ。」

「ふーん、これからどうすると？」

「夜になったら神様に来ていただくよ。」

夜になると、神様、仏様におごく、お仏飯をあげ、お光を灯します。

そして家族みんなで玄関に並び、戸を少し開けて「福の神さま、お入りください」と手を合わせます。

しばらくして今度は「熱病の神様、お入りください」と唱えます。

「ねえ、熱病の神様ってなんね？」

「熱病はね、今でいう、はやり病のことたい。」

「ふーん、そうなんだ。なんでそんな神様も迎えるとかいな？」

「ふふ、それは後でね。」

神様が揃われると決まった順番でお参りします。

「今年一年の豊作と家族の幸せに感謝し、新たな年もいい年でありますように。」

みんなで手を合わせます。

「あれ？熱病の神様はなんであそこにあると？」

熱病の神様だけ、床の間の一段高い所に祀ってあります。

お飾りも他の神様とは少し違います。おごくはゆずり葉に盛ってあり、

お光は角切りの大根に竹串を通したものに灯しています。

「今宵一晩の宿をとってもらいます。どうぞ本家で正月をお迎えください」

明けて元旦です。

夜明けとともに家の主人であるおじいちゃんは熱病の神様だけにお光りをあげ、静かに拍手を打ち、話しかけます。

「一夜の宿はどうでしたか？今年一年間はどうか本家へ立ち寄らないでください。」

そしておじいちゃんは熱病の神様のお飾りを全部、懐に入れ、家を出ます。

「おじいちゃん、どこに行くと？」

「室見川に行くんじゃよ。」

「待って、ぼくも行く！」

「おじいちゃん、なんで熱病の神様なんか、お迎えすると？」

「はっはっはっはっはっ、熱病の神様はみんな好かんじゃろ？」

でも熱病の神様だって寒い夜をひとりで、さまようのはさみしいもんじゃ。

ましてや、正月にさびしいというのはどうじゃるか？」

「さびしかと思う…」

「それじゃ。正月くらいは泊まる場所をご用意し、寒い夜道をさまよわなくてもいいように

一夜の宿をとってもらうんじゃ。」

「ふーん。そして、さっきの呪文のように、お願いするんだね。」

「そうじゃよ。家族みんなが、はやり病にならんようにな。」

「さあ、川に着いた。ここで熱病の神様とお別れたい。」

ぼくは心の中でつぶやきました。

「今年一年間、どうかぼくの家には立ち寄りしないでください。家族みんな、仲良く、健康でありますように！」

「こうして宗三郎さんの家のお正月は始まります。

この宗三郎さんの家に伝わるお話しは、早良区次郎丸の旧家に伝わるお話しです。